「表紙新デザインによせて」

今回は一般社団法人として新しい時代を歩み始めたプラスチック成形加工学会の顔とも言える会誌「成形加工」の新しい表紙として、私のデザイン案を選定頂き大変光栄に思います。

このデザインを考えるにあたり、まずは成形加工の要素である「溶融」「混練」「成形」を入れ込むことを考えました。雑誌の表紙にふさわしい、シンプルなデザインを目指して試行錯誤を繰り返した結果、二色の球体が変形し混ざり合って四角いキューブになる、というメインのモチーフにたどり着きました。そのモチーフを元に、いくつかのデザイン案を考えスケッチを繰り返すなかで、この成形されたキューブはどこに行くのだろう？との思いが生まれました。

成形された製品はユーザーの元で使用され、いつかは廃棄されますが、唯々製品を作って廃棄を続けていたのでは、限りある資源は枯渇し環境は廃棄物で汚染されてしまいます。近年、資源問題、環境問題は社会問題として認知度が高まっており、様々な場面で「サステイナブル」という言葉を耳にするようになってきました。成形加工学会においても使用後の製品のリサイクル、リユースに対する取り組みの重要度は今後ますます重要になると思います。そこで、メインのモチーフでキューブが成形された後に、成形されたキューブが小さなキューブに解体され、さらに小さな球に変化されたのち、最初の二色の球体に再構成される、最初と最後を繋げ、終端のないデザインとしました。応募に当たってのタイトルはデザイン完了後、最後に決めたのですが、物が形を変えながらも回り続ける永続性を表す『循環』としました。

審査後に審査委員会の皆様からのコメントを頂きましたところ、私の意図を離れて様々な解釈をされていることに、デザインの難しさを感じるとともに、面白さを感じました。私の意図である物質の循環だけでなく、人と人が、知が、技が、出会い、混ざり合い、反応して、社会に還元され、更に新たな進歩を生み出す。プラスチック成形加工学会を舞台として、様々な形での『循環』が行われ、成形加工学会がますます発展することを願っております。そして、その『循環』を象徴する表紙として、私のデザインが皆様に受け入れられるようになれば幸いです。

宝田　亘